

二十六回生 瀧(大森) 梢

音澄みて若き奏者に春立ちらぬ

薄氷や朝の紅茶の熱きこと

磨る墨の色艶めくや水温む

遠山のほのぼの明けて初音聞く

天指して野梅の樹々の立ち上がり

海原に航跡消ゆる後寛忌

花暮れて闇に溶けゆく山一つ

魅せられてまたついてゆく風の盆



朝霧をまといて京の野菜売り

花野一枚抱へ夕日の沈みゆく

いんやりと砂漠に昇る今日の月

落葉してわが家市中の山居なり

かざはなのひといら受けて旅始む

風呂吹や自説墨守の夫と居て

大寒の青手九谷の色深く

俳句は1981年ごろから雨月主宰 大橋敦子先生(今年2月ご逝去)、大橋眺先生に指導を受け、現在に至る。きっかけは翻訳をしていたころ、我が日本語の語彙の乏しさを情けなく思い、俳句の短くて要を得た表現に魅せられ、始めた。しかし句作に励む努力も少ないまま、今は日記代わりの記録になってしまつて残念。